



Vol.15

RUNNER

◆ 目 次 ◆

活動の現場……………2

今日のRUNNER
ハト……………4

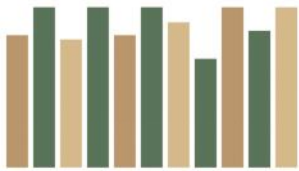
フクロウの営巣……………6



保護された後の野生動物たち…9

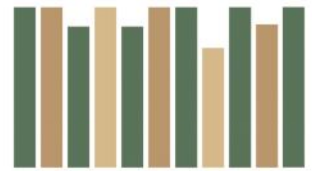
ボランティア雑感……………11

インフォメーション……………12



活動の現場

このコーナーでは普及啓発活動やイベントなどに参加したボランティアがその体験をもとにレポートしています。



第2回 夏休み子ども体験教室 報告

8月25日に第2回 夏休み子供体験教室「野生動物を学ぶ」が開催されました。子供たちが傷病の野生動物と触れ合うことにより野生動物の知識を深め大切に守っていく気持ちを育てること、また動物を取り巻く問題点を知り人と共生していくためにはどうしたらよいかを考えることを目的に昨年の夏からスタートしました。当日は小学4年生から6年生まで計6名が集まりスズメグループ、オオタカグループ、ツバメグループの3班に分かれ午前中は傷病舎のそうじ体験や餌やり体験などが行われました。トビやカワウを間近で見たり触ったりしながら、獣医師の鶴飼先生より羽根の構造などのお話を聞きました。皆さんとても真剣な表情で聞き入っていました。お昼前にはセンター下にある池まで下り、カルガモの放野に立ち会いました。午後からはセンター内のレクチャールームへ移動し、机を囲み野生動物のケガや病気の原因について考えました。手作りの神奈川県内の大きな地図の上に県内に住む動物カードを置いてもらいます。さらに人の社会生活関連カードを置き、その生活カードがそこに住む動物にどんな影響を与えるかを考え答えてもらいました。次から次へと意見が出てびっくりするほどです。獣医師荒木先生からはセンターの動物保護の様子をスライドを見ながらお話いただきました。なかなか見ることのない写真にこちらもちろみじっくり見入っていました。その後ケガや病気の野生動物を少なくするために、自分たちができると思うことを紙に書いてもらい発表です。皆さん積極的に手をあげ発言し感心するばかりでした。最後に自分の思いの絵や文字を描きいた羽根しおりをつくり体験教室は終了しました。

次回の開催日程は未定ですが、興味のある小学生の皆さん、次は是非ご参加ください！



動物の怪我の原因を考えてました



動物たちの食事を作りました



掃除を体験しました



カルガモを放野しました

行徳野鳥観察舎足輪勉強会 報告

この度野生動物救護の会では新たな取り組みとして放野個体（猛禽類・水禽類のみ）に足環をつけて、追跡調査を行う予定です。先日その第一歩としてNPO法人バードリサーチでカワウに足環を付けて標識調査をしていらっしゃる加藤ななえさんを訪ねて、足環について御教授していただきました。加藤さんに他の鳥類で標識調査をしていらっしゃるという佐藤達夫さんを紹介していただき、今回はその方を訪ねて10月19日に千葉県市川市にある「行徳野鳥観察舎」に行ってきました。ここはとっても広い敷地で海に面しているので海鳥はもちろん干潟の生き物や植物などもたくさん観察できます。この日は佐藤さんに特別に敷地内を案内していただきました。途中、震災の影響が未だ色濃く残っている場所もあり地震の凄さにも驚かされました。又、この施設は千葉県内で保護される傷病鳥の救護も行っているのでそちらも見学させていただきました。センターにもいるアオサギやカワウ、珍しい鳥だとアカエリヒレアシシギなどの野鳥が保護されていました。肝心の足環のお話ですが、かなり具体的な内容をお話していただき、これからの見通しがついたように思います。まだまだクリアしていかなければならない課題はたくさんありますが、少しずつ片付けていき一日でも早く始められるようにしたいです。



加藤ななえさんからレクチャーを受けました。



行徳野鳥観察舎敷地での野鳥観察

この新しい取り組みは只今、運営スタッフが一生懸命準備を進めております。準備が整い次第、改めて皆様にスタッフ募集などのお声かけをさせていただくので、今しばらくお待ちくださいますよう御理解・御協力をお願い致します。

子ども・若者の自然フォーラム 報告

10月21日横浜市西区紅葉坂にある神奈川県立青少年センター本館にて、「子ども・若者の自然フォーラム海の知恵・山の知恵・人の知恵」が開催されました。桜木町駅をランドマークタワーとは反対の方角に出て、紅葉坂を

登るとそこに神奈川県立青少年センターがあります。正面玄関に入ってすぐのホワイエに救護の会を含めた自然体験活動を行っている団体のブースがあり、救護の会が一番手前・右側の場所で、傷ついた野生動物たちのパネル展示やポスター展示、映像を流し会の活動紹介を行いました。小さなお子さんから年配の方まで、幅広い年代の方が来場されました。救護の会ブースにも高校生が立ち寄り、興味深そうにポスターを見たり話を聞いてくれました。また偶然にも春休みの体験教室に参加された親子にもお会いすることができました。団体ブースの他に、ホールではミュージシャン白井貴子さんの歌と楽しいトーク、またCW・ニコルさんの講演がありました。また「自然活動をすすめるためには」という内容でパネルディスカッションも行われ、多くの方が参加されました。

秦野市民まつり 報告

11月3日秦野市民まつりに、わたしたち野生動物救護の会は「鳥は急に止まらない!!～秦野市立図書館における4年にわたる衝突の調査について～」という題目で、沢山の写真を使って展示参加をしてきました。最初はあいにくの曇り空で寒いくらいでしたが、お祭りが始まると沢山の人が展示を見に来てくれました。「図書館でこんなことが起きていたんですね」「初めて知りました」「こんなふうに窓ガラスが見えるのね」「市役所の人にも考えてもらわないとね」等々。2009年からはじめたバードストライクの調査ですが、まだまだ市民の皆様には知られていない調査だということがよく分かる感想でした。秦野市立図書館は景観のよい場所に建っていて、それが逆に野鳥に対しても衝突が多くなっているという実態を知ってもらえたのではないかと思います。「1羽でも野鳥の衝突を減らすために」これからも調査及びバードストライク防止策の検証を図書館の方たちの協力を頂きながら続けていきたいと思ひます。



～Asia Birds Convention～ 講演会 報告

11月4日野生動物救護の会を代表して理事長の渡辺が講演者の一人として話をしてきました。この講演会は、野鳥部門と飼鳥部門に分かれ、それぞれの分野のプロフェッショナルな人々が話をするという、とても貴重な場です。150名を超える聴講者はとっても熱心な方が多く、開場1時間前にはすでに長々とした列が続き皆さんの関心の高さに驚かされました。野鳥部門の講演として「自然に帰す ～保護された猛禽たちの野生復帰までの道のり～」と題して神奈川県救護システムと、猛禽たちの訓練を行う様子をパワーポイントとビデオ映像を使い熱く語ってきました。聴講者のかたたちも真剣に聞いて下さり、野鳥の救護の実態について少しでも知っていただけたのではないかなと思ひます。飼鳥と野鳥という違いはありますが、1羽でも傷つく鳥を減らすためにこれからも協力していけると良いですね。



▲渡辺理事長による講演の様子

◀会場の様子

ジャパン・バード・フェスティバル2012 報告



11月3日、4日に千葉県我孫子市でジャパン・バード・フェスティバル2012が開催されました。救護の会は、野生動物救護の現状や活動をより多くの方々に理解してもらえよう、今年も出展しました。イベントに参加した加藤わか葉さんより、感想が届いています。

4年ぶりにJBFのお手伝いに参加しました。前よりも出店数は減っているような気がしましたが、天気が良かったこともあり、たくさんの方がブースを見に来てくれました。衝突が原因で、長期飼育で保護されているツツドリとメジロを見ると、話で聞くよりもインパクトがあるようでした。ただ、ツツドリを見て「可愛い! 飼いたい!」と言われた時には少し焦りました。その方にも保護されてきたことをちゃんと説明しましたが、一歩間違えると全然違う解釈をされてしまうので生体展示は注意が必要だと思ひました。普段、センターの傷病舎で作業するのとまた違った活動ですが、啓発活動も大切だと改めて思ひました。率直に楽しかったので、参加してよかったです。





今日のRUNNER



第十五走者：ハト

ここでは保全センターに運び込まれた傷病鳥獣について保護記録やエピソードを交えてご紹介します。

ドバトとキジバト

都市部でよく見かけるハトには2種類いるのをご存知でしょうか。ドバトとキジバトです(図1)。ドバトは野生種のカワラバトを家禽化した後、再度野生化したものを指します。また、原種のカワラバトは外来種であり、ドバトも野生動物とはみなされず、保全センターでは野生動物救護の対象外となっています。

キジバトは本来山地に生息するハトの仲間、ドバトと比べて遥かに強い警戒心を持ちます。

ドバトは家禽時代に様々な品種が作られたため、羽の色や模様などの外見的特徴は多岐に渡りますが、対してキジバトは翼に黒と赤褐色の鱗状の模様があります。

(a) キジバト



(b) ドバト



図1

ハトの利用

ハトは主に通信用と食用の2つの役割を担っていました。伝書鳩はローマ時代には一般的に用いられ、戦争時には軍事用に、戦後も報道用として活用され、ラジオや電話が広く用いられるようになるまでは主な通信手段でした。伝書鳩が廃れた現在では、レース鳩としてレースを目的として飼育されています。食用鳩は、日本では1920年頃から飼育されだしたのですが、食用として定着することはありませんでした。また、ハトは群れを成す性質から平和の象徴とし愛玩用としても飼育され、多種多様な品種が生み出されました。

伝書鳩の野生化

通信用に用いられてきた伝書鳩やレースを主目的としたレース鳩は、ハトの持つ飛翔能力や帰巢本能を利用したもので、ハトは1000km以上離れた場所からも巣に戻ることができると言われていています。ハトは目から得る情報に加えて、地磁気や太陽の位置から自分のいる位置を把握し、目的地である小屋へ帰ってきます。通常は200km以内で書簡や物資の運搬を行います。道中、天敵に襲われて命を落としたり、道に迷って帰れなくなりそのまま野生化してしまうケースもあり、通信を確実に果たせるように複数の伝書鳩を放つことが多かったそうです。近年、伝書鳩やレース鳩の帰還率が低下傾向にあり、ハトの群れの中に足環をつけたハトが見られることがあります。

伝書鳩の原種であるカワラバトは岩壁の割れ目などの高い場所に営巣するため、市街地ではマンションや駅等の人工建造物は恰好の営巣場所となっています。

○図鑑○ NO.15

・ハト科 *Columbiae*

| | |
|---------|-------------------------|
| カワラバト属 | <i>Columba</i> |
| カラスバト | <i>C. janthina</i> |
| キジバト属 | <i>Streptopelia</i> |
| シラコバト | <i>S. decaocto</i> |
| ベニバト | <i>S. tranquebarica</i> |
| キジバト | <i>S. orientalis</i> |
| キンバト属 | <i>Chalcophaps</i> |
| キンバト | <i>C. indica</i> |
| アオバト属 | <i>Treron</i> |
| アオバト | <i>T. sieboldii</i> |
| ズアカアオバト | <i>T. formosae</i> |

一般に体がやや太り気味で、体に比べて頭が小さく首は細い。全長は30-35cm、大型のものでは75cm、小型のものでは15cm。抱卵期間は2-4週間で通常2つの卵を産む。孵化したヒナにはピジョンミルクと呼ばれるエサを与える。このエサは脂質とタンパク質が豊富に含まれ、雌雄ともに分泌する。そのため、エサの量に関わらず一年中繁殖が可能で、多いものでは年7~8回繁殖することがある。

営巣場所は樹上で、小枝を使用して皿状の巣を作るが、地上や岩棚の隙間なども利用する。

ハト害と感染症

ドバトは定住性・集合性が強いいため、糞や羽、鳴き声やにおいが問題となることがあります。

ハトの巣やとまり場として利用される建造物やその下にはハトの糞が堆積しやすく、衛生上や美観上から大きな問題となっています(図2(a))。また、放置された糞は金属の腐敗を促進させます。

(a) ハトの糞害



(b) キジバトの衝突痕



図2

糞や羽はオウム病の原因である *Chlamydia psittaci* やクリプトコッカス症の原因となる *Cryptococcus neoformans*、ダニやシラミなどの温床にもなります。

また、ハトの羽は特に抜けやすく、羽の縁が粉状に崩れます(図2(b))。これらがゴミや埃として堆積するだけでなく、喘息などを伴うアレルギーの原因となることがあります。

動物との付き合い方

都市化に伴い自然環境が失われて多くの鳥獣の生息分布地域が狭められている中、ドバトは都市化に適応して個体数を増加させています。

その背景としてハトへのエサやりが挙げられます。ハトはエサが豊富にあれば、季節を問わずに繁殖を行います。ハトの個体数増加は糞害や衛生環境の悪化など、周辺住民への迷惑行為につながります。そのため、所有・占有しない動物へのエサやりを禁止する自治体(荒川区;荒川区良好な生活環境の確保に関する条例 など)や、広島市のようにエサやりの自粛を呼びかけることで個体数抑制を行なっている都市もあります。

野外に生息する動物の習性を理解せず無闇に手を差し伸べることは、果たして正しいことなのでしょうか。

フクロウの営巣

2010-2012 年のモニタリング報告

フクロウってどんな動物？

「フクロウ」と聞いてどのような生き物をイメージしますか？フクロウは漢字の「不苦労」とかけて幸せを呼ぶ鳥と言われ、またその佇まいから「森の哲学者」と呼ばれ知恵の象徴とされ、古来から愛好家の多い鳥です。

形態は全長 48～52cm、翼開長 94～102cm。鋭い嘴と爪を持ち、翼は短めで幅が広く尾羽がやや長いのが特徴です。夜行性のため主に夜間、狩りを行います。九州以北に留鳥として分布、平地から低山の林や神社や寺など大きな木のある場所に生息し、老木の樹洞に営巣する性質を持っています。

神奈川県のカラスの「今」

カラスは神奈川県レッドデータブック 2006 年版で準絶滅危惧種に指定されています。県内では営巣可能な老木が少なくなり、営巣に適した環境がなくなりつつあります。東丹沢でもカラスの鳴き声が確認されていますが、営巣木となる木が少なく繁殖が出来なくなっている可能性もあります。保全センターでは 2006～2011 年の 5 年間に 17 羽のカラスが保護されています。

調査目的

巣箱を掛けることは営巣を可能にする意味で種の保存上意義があると考えました。更に、巣箱を設置、観察することで繁殖形態を学び今後の救護活動に役立てることを目的としました。検討の結果、巣箱は丹沢東部の林に掛けることにしました。

なお、調査会社の方からご協力頂き、巣箱内にカメラを設置して外からモニターで中の様子が観察できるようにしました。

観察記録

2010 年から 2012 年の 2 年間にかけた観察記

録を表 1 に示します。2010 年 2 月に No.1 の巣箱、11 月に No.2 の巣箱をかけました。当年には営巣は確認されなかったものの、2011 年には No.1 の巣箱、さらに 2012 年は No.2 の巣箱にて繁殖が観察されました。2012 年に No.1 での繁殖が行われなかったのは No.1 の近くで伐採があった事が関係していると思われます。抱卵期間が 27 日から 32 日とされていることから^a、3 月 14 日～16 日に産卵、抱卵期間はおおよそ 30 日、孵化後約 27 日で巣立ったと考えられます。二度とも野外での巣立ち雛は見つけることができませんでした。

2012 年の巣立ち後、巣箱のメンテナンスも兼ねて取り外し中身を観察しました。(写真 3)

取り外した巣箱内には食痕が多く、特にネズミの歯型は多く確認できました。アカネズミ、カヤネズミ、アズマモグラ、アブラコウモリの片翼、昆虫ではシロスジカミキリ、また鳥の羽はコジュケイ、シロハラ、ツグミが出てきました。

今回の観察結果のように巣箱が利用されている事は、(モニタリングする側としてはありがたいのですが…)やはり営巣に適した大きな樹洞が少ないのではないかと推測されます。

また猛禽類や希少種の繁殖に関してはカメラを持った人たちが長時間巣の近くに居座り、それによって親が巣を放棄するなどの話も近年聞かれますので心を痛めるところです。



^a 原色野鳥図鑑 中村(1995)

表 1

| 年 | 月 | 日 | 事象 |
|------|----|---|--|
| 2010 | 2 | 11 | 巣箱を設置【No.1 巣箱】 |
| | 11 | 6 | 約 100 メートル離れた場所にもう 1 つ巣箱を設置【No.2 巣箱】 |
| 2011 | 3 | 24 | No.1 のモニターにて巣箱内に座っているフクロウを確認。(写真 1-1) |
| | 4 | 27 | 2 羽のヒナを確認。生後 2 週間位。(写真 1-2) |
| | 5 | 4 | 2 羽のヒナの大きさに違いが出てきた。(写真 1-3) |
| | | 12 | 1 羽のみヒナを確認。大きい方が巣立ったと思われる。(写真 1-4) |
| | | 14 | 巣箱内は空になっていた。(写真 1-5) 5 月 12 日から 14 日の間にもう 1 羽も巣立ったと考えられる。 |
| 2012 | 4 | 16 | 巣箱内にフクロウを確認。(既にお腹にヒナを抱いている模様) |
| | 5 | 1 | ヒナ 2 羽を確認 (写真 2-1) |
| | | 4 | ヒナ 2 羽を確認 |
| | | 6 | 再度見に行くもモニターが故障しており内部を観察できず。 |
| | 10 | 近くの木に親鳥の姿を確認。まだ巣箱内にヒナがいる模様。 | |
| | 11 | 巣箱の入り口から 1 羽のヒナがこちらを窺っている姿を確認。(写真 2-2) | |
| | 12 | 巣箱のそばに親の姿は見え、もしかしたら早朝に巣立ったかと思われる。 再度 13 日にも行ってみたが辺りは静まり返っていた。 ヒナは 2 羽とも 8 日から 12 日の間に巣立ったとみられる。 | |
| | 14 | メンテナンスのため巣箱を撤去。 | |

編集後記

繁殖の観察はリアルタイムで皆様にご報告をしたいと最初は思っていました。しかし、前出のように、愛好者の多い猛禽類かつ希少種であることから、繁殖場所が不特定多数の方に知られることによる営巣放棄の可能性を危惧し、一部のスタッフのみで観察を行い結果のみのご報告となってしまう

ったことをご了承ください。

最後になりましたが、本活動はく丹沢の緑を育む集い実行委員会)で実施している「ボランティア団体活動助成事業」の助成を受けて実施することができたことご報告致します。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。



写真 1-1



写真 1-2



写真 1-3



写真 1-4



写真 1-5



写真 2-1



写真 2-2 (撮影:黒谷)



写真 3
(左:七沢森林公園・青木副園長指導のもと食痕調査
右:食痕例(ネズミの頭骨))



保護された後の野生動物たち

保全センターでは日々多くの傷病鳥獣を受け入れています、人の手で野生動物を飼育するのは難しい点も多くあります。今回は野生動物を保護した後の難しさについて紹介したいと思います。

はじめに

保護された野生動物たちを少しでも多く野生復帰させたいと思い活動していますが、なかなか簡単にはいかない事も多々あります。私がセンターで働いていたときは保護された動物のうち約半数は短期間で亡くなっていました。一命を取り留めても自力で自然の中で生活できないであろう動物も多く、実際に放野できるのは2～3割程度でした。また、長期間飼育しているうちに保護時には無かった問題が起きてしまったり、順調に回復していた動物でも様々な原因で放野が遅れたりという事がありました。動物種によって特徴的なものもあれば、突発的なものまで色々な問題がありましたが、その内で代表的なものをいくつか紹介していきたいと思います。

自傷行為

外傷を負った哺乳類を保護している時に見られる事がありました。ペットの鳥類では見られる事がありますが、保護された野鳥では私は見た事はありません。

主に四肢に骨折など外傷がある場合、その部分を気にして自ら噛み、余計に傷を悪化させてしまう動物がいます。中には骨が露出するほど深い傷になってしまったり、指や足先を食いちぎってしまったりする程の激しい自傷行為もあります。イヌやネコでも自傷行為は見られることはありますが、ここまで激しいものは殆ど無いと思います。

患部に強い痛みを感じている事が原因でしょうが、自然の中から保護施設へと連れてこられた環境の変化からくる精神的な事も一因としてあるかもしれません。原因を除去できれば解決するのかもしれませんが、なかなか難しい場合が多く、一度始めると余計に痛みが増し悪循環になってしまうケースが多いです。



骨折を負ったタヌキ
患部に口が届かない様にエリザベスカラーを装着しています。

羽の損傷

鳥類を保護したとき、怪我や病気の状態によって、はじめは狭いケージへ入れる事が多いです。しかし、ケージ内で動き回るうちに羽を擦ってしまい、尾羽や風切羽がボロボロになってしまう事があります。羽の傷みが激しいと飛行能力の低下につながります。体調が回復しても、羽が傷んでいると放野ができず、無駄に保護期間が長くなってしまいます。羽のはえ代わりを待っていると1ヶ月以上かかってしまう事もあります。猛禽類は狩りをするため、高い飛行能力がないと野生下での生存は難しいと思われ、保護期間中に筋力が衰えたり、狩猟能力が落ちてしまったりすると放野後の生存が難しくなってしまうかもしれません。保護期間中の羽の保護は重要です。



翼の骨折のため保護されたオオタカ。骨の変形が大きく野生復帰は難しい個体ですが、ケージ内で飛び回る際に尾羽が擦り切れてしまいボロボロになっています。ボロボロの羽では人が餌を与えている環境では生きていけますが、骨折がなかったとしても野生下で、自力で生きていくのは難しいかもしれません。



尾羽にガードを着けたチョウゲンボウ。この様に羽を保護して損傷を防ぐことができます。

写真ではレントゲンフィルムを使っていますが、封筒などをテープで補強、防水処理をしたものでも十分な効果があると思います。

しりゅうしょう 趾瘤症

鳥類の足の裏に起こる炎症性の病変です。大型の鳥類で多く見られます。また、野生下で生活している鳥類にはほとんど見られない病気のため、人工的な飼育環境が悪影響を与えていると考えられます。軽度のものでは皮膚が薄いピンク色になる程度ですが、悪化すると足の裏が腫れ、膿が溜まったり感染を起こしたりします。さらに悪化すると骨の変形を伴う程の病変になる事もあります。

原因は、不適切な止まり木により足への負担が増える、足の骨折などにより片方の足に体重がかかり続ける、運動不足などによる血液循環の悪化などが考えられます。

治療をすれば症状は改善しますが、根本の原因の除去が出来ないと同じことを繰り返す事もしばしばあります。

止まり木にクッションを付けるなどして、足への負担を軽減すると予防効果があります。



左足を失ってしまったため、右足に趾瘤症を発症したオオタカです。皮膚が欠損して痂皮(かさぶた)を形成しています。その下には膿が溜まっていました。



治療によりかなり改善しました。しかし、この個体は左足を失っているため右足の負担を減らすことが難しく、治療を止めると再発するという事を繰り返していました。

羽の汚れ

狭いケージで飼育していると糞で羽が汚れてしまいます。当然汚れた羽では飛行能力は落ちます。また、水鳥の場合、大羽が特殊な構造をしており、羽に空気の層をつくると共に耐水性を与えています。そのため水上に浮くことができますが、羽が汚れるとこの構造が維持できなくなり、浮くことができなくなってしまいます。本来なら、羽繕いをして、羽を整えるのですが、糞によるひどい汚れは自力では十分に落とすきれませんし、長い間水浴びをさせないと羽繕いをしなくなってしまいます。

汚れた羽のまま放野すると水鳥は溺れてしまいますので、しっかりと羽を整えてあげることが重要です。



保護されたカワリシロハラミズナギドリ。狭いケージで飼育しているため糞便による羽の汚れが目立ちます。この状態で水面へ放すと溺れて沈んでいきます。放野前には体をきれいにしなくてはならないことが絶対が必要です。

終わりに

このように、保護された後にも色々な問題が起こる事があります。また、保護後の問題はこれで全てではありません。回復が順調でも気を抜かず、様々なことに注意しながら経過を見ていく必要があります。

また、保護された後に起こる問題の多くは、野生下から人の飼育下へ移るといった環境の変化が共通する大きな要因としてあるように感じます。人の飼育下にいる時間が長ければ長いほど、野生動物たちに起こる問題が増えていくと言えるかもしれません。この様な問題を減らすためには早期の放野というのが良いのではないかと思います。

確かに、放野のタイミングというのは難しいものです。しかし、慎重になって様子を見ているうちに、保護された時には無かった問題が起きてしまうのは残念な事です。

野生動物たちをより良い状態で放野するために、保護された動物には適切な治療・処置を行い、早く怪我や病気を治し、早期に放野するというのが理想的ですね。



ボランティア雑感



保全センターのツバメとメジロの里親をしているボランティアの塩澤さん。
ボランティア登録後、初めて野鳥を預かった当時の体験を語ってくれました。

<初めての短期飼養>

2008年度のボランティア研修を終了した1ヶ月後、羽根がボロボロで尾羽もない、違法飼育で保護されたキビタキ1羽を、綺麗に羽根が揃ったらセンターへ還すという条件で、短期飼養として預かせていただきました。

キビタキの生態は、あまり知られてないそうです。すり餌は、3分・5分・7分の3種類に、ドッグフード、ミルワーム10～20匹与えてみました。すり餌は7分をよく食べ、ドッグフードは食べず、ミルワームは1匹残らず食べました。



キビタキ

9月頃換羽が始まり、数週間後、止まり木から落ちるようになり、ひっくり返って脚をバタバタと『死』を覚悟しなくてはならない状態が、1週間位続きました。職場でもキビタキの事が頭から離れず、休憩時間に、当時センターの獣医師でした加藤先生に、相談やキビタキの状況をメールし、その都度、励ましのお言葉やご指導を、沢山いただきました。

「このまま死んでしまったらどうしよう！」「無事にセンターへ還さなきゃ！」の一心で、キビタキを診ていただきたく、センターへ連れて行きました。当時、もう一人の獣医師、福富先生にキビタキを診察していただきました。「虫を沢山与えて下さい。」と、ご指導をいただきました。

帰宅後すぐ、ミルワームを30匹程与えるとすぐに食べ終えてしまい、「足りないのかな？」と思い、追加20匹程与えました。これまたペロリ。ミルワームを食べる食べる！1日約100匹。すり餌の7分もよく食べ、コオロギ、バッタを与えたら、体力が出たのか、飛びついて食べました。10月に羽根が揃ったため、キビタキをセンターに連れて行く事を加藤先生へ伝えました。

奮闘しながらも、キビタキの短期飼養を終えられたのは、加藤先生、福富先生のご指導があり、また、キビタキの生命力が素晴らしかったのではないかと思います。良い経験をさせていただきました。有難うございました。

また、現在センターの獣医師である荒木先生、鶴飼先生、今後にご指導宜しくお願い致します。

ドナドナの替え歌



♪ある晴れた 昼下がりに
センターへ続く道

電車とバスに揺られ
2時間かけて行く

違法飼育で もう捕まるな

野生で達者に 暮らしてね

キビタキ キビタキ
もうすぐお別れだ～

キビタキ キビタキ
心もゆれる～♪



すり餌 豆知識

すり餌は植物質の原料(米、大豆、小麦など)と動物質の原料(魚粉)によって作られ、植物質の原料を上餌、動物質の原料を下餌とよびます。すり餌の「～分餌」というのは上餌の重量に対する下餌の重量比を表します。たとえば三分餌というのは上餌100に対して下餌が30の割合で混合されています。下餌の多い餌を「強餌」、少ない餌を「弱餌」とよび、虫食性の強い種類ほど下餌すなわち動物性たんぱく質の割合が多い「強餌」を使用します。

日本ではすり餌を使ってメジロ、ウグイス、ホオジロ、コマドリ、オオルリなど昔からさまざまな種類の野鳥が飼養されてきましたが、現在は国内に生息しているこれらの鳥はすべて保護下に置かれており、許可なく飼養することができなくなっています。

参考文献:《愛玩動物飼養管理士》2級第2巻

インフォメーション

イベント

◆探鳥会(宮ヶ瀬)

▽日時 1月中旬(予定)

▽場所 清川村宮ヶ瀬湖 周辺

☆冬の宮ヶ瀬を散策しながら一緒に冬鳥を見に行きませんか？

この季節、水辺では色々なカモ類やオオバンなどが見られますし、草地や林ではジョウビタキやウソ、ベニマシコなどのかわいらしい野鳥に会えるかもしれません。

◆ラインセンサス(探鳥会)(秦野)

▽日時 2月中旬(予定)

▽場所 秦野市立図書館 周辺

☆救護の会では秦野市立図書館でバードストライク(窓ガラスへの鳥の衝突)の実態調査を継続して行っています。今回は周辺地域でどんな野鳥が多く見られるのか、実際に足を運んで確認してみませんか？



年末年始の保全センターボランティアについて

◆自然環境保全センターの冬季休業

▽休業期間 2012/12/29(土)~2013/1/3(木)

☆この期間、センター職員は1人体制で午前中だけの出勤になり、動物たちの世話も手薄になりがちです。お忙しい時期とは思いますが、お時間のある方、是非お手伝いをお願いいたします！(*休業期間中はセンターへの電話/FAXも不通となりますので、ご注意ください)

衝突調査

◆秦野市立図書館衝突調査

▽日時 毎月最終金曜日 → 図書館が改装工事中のため、しばらくの間お休みします。

▽場所 秦野市立図書館

☆野生動物救護の会「バードストライク研究会」では窓ガラスへの野鳥の衝突調査を一緒にしてくれる方を随時募集しています。興味のある方は事務局までご連絡を！

* 詳細は当会ホームページをご覧ください *

☆☆会員へのお誘い☆☆

当会は、ボランティアスタッフの協力と設営趣旨にご賛同いただきました皆様方の寄付によって運営されております。私たちの活動を支えてくださる賛助会員も同時に募集しています。

★一般会員:どなたでもご参加いただけます(年会費 2,000 円)

★学生会員:学生の方(年会費 1,000 円)

★賛助会員:当会の活動にご賛同いただき寄付をしていただいた方
年会費:法人一口 5,000 円 個人一口 3,000 円 一口以上

振込先

ゆうちょ銀行振替口座 : 00270-0-47040

名義 : 特定非営利活動法人 野生動物救護の会

発行月:2012年12月 発行:特定非営利活動法人 野生動物救護の会 電話:0463-75-1830
〒259-1306 神奈川県秦野市戸川 1086 番地の 4 ホームページ:<http://kanagawa-choju.sakura.ne.jp/>
編集者 表紙絵:平沼亜矢子 活動の現場から:平沼亜矢子 今日のRUNNER:松本卓巳
フクロウの営巣:安井フクロウチーム 保護された後の野生動物たち:福富潤
ボランティア雑感:塩澤直美 インフォメーション:神崎さつき